

## 掃海艇十八号

兵庫県 梶本忠義

私は山林業を主とした農家で八人家族の長男、徴兵検査官から「お前は泳げるか？」と聞かれたときに「浮かぶ位はできます」「そうか」と言われたので、あるいは海軍かなと予感した通りになりました。そして当時としては珍しく、大竹海兵団が創立されたばかりの時で、その大竹海兵団の第一期生として、まだ兵舎の壁が半乾きでした兵舎に入団しました。親父から入団前に軍人勸諭を覚えるよう言われましたが、海軍は五カ条の御誓文をたまに言わせられた程度で、陸軍とは全く違いました。

一教班十八人が十教班で一分隊となります。新兵だけが教練を受ける三カ月間は想像以上にきびしく、特にカッター訓練は掌と尻に肉刺<sup>まゆ</sup>ができて

つぶれるまでやらねば海軍精神注入棒が遠慮なく見舞ってきました。

海兵団の対岸にある宮島までのカッター競漕は一位になった班だけが食事にありつけるもので、他の九班には欠食という罰が待ち受けていました。それで月一回のカッター競漕は恐怖の的になりました。精神注入棒の他にロープを海水に浸したやつで尻を叩かれると棒以上に痛くて、愛知から来ていたお寺の息子は、そのロープで叩かれ、動けなくなつて病院に入院してしまいました。「歯を喰いしばつれ！ いくぞ！」の声と共に叩かれ、終われば「有難うございました」を言われ、ばまた叩かれる。風呂では青黒く腫れた尻の陳列で異様な光景でした。

こうして三カ月が過ぎると学校行きが決まり、取敢えず小松島にある航空隊付き勤務を命ぜられ、連絡船に乗って交通舟艇員になりました。

古年兵と一緒に内務になり、朝のハンモックの

整頓も自分の他に古年兵の分も片付けねばならず大変でした。

昭和十七（一九四二）年十月、待望の砲術学校に普通科第九十一期生として入学しました。翌昭和十八年二月には同校卒業と同時に「掃海艇十八号」に乗組を命ぜられました。

「掃海艇十八号」は制式艦といって純粹に掃海専門に造られた軍艦でした。速力は一八ノットで遅いが曳く力は強く、正に掃海向きになっていました。また船団護衛にも向いた速度でもありませんた。

排水量は一〇〇〇トン。乗員一〇〇人。艇長は少佐でした。私は砲術学校出身ですから備砲の口径一二センチ二門のうち前甲板にある大砲に配置され、砲弾一発の重さは一人でやつと肩にかつげる位です。のちに二等兵曹になった時にその大砲の責任者になりました。部下は六人でした。大砲の性能は射程六〇〇メートルでした。艇のその他武装は対空機関砲二五ミリ二連装が一門あるだ

けでした。

もともと掃海艇の任務は敵の敷設した機雷を除く去するのと敵潜水艦を爆雷で攻撃するのが任務の筈ですが、私が乗艦してから一回も掃海作業は無く、専ら輸送船団の護衛ばかりでした。

昭和十八年十一月、横須賀海面防備部隊に属し、主として北海道釧路方面行き船団護衛に当たっていました。戦局の推移に伴って南方行きの船団が多くなり、パラオ、フィリピン、ボルネオ、ジャワ、スマトラ、シンガポール、仏印サイゴン等の各方面の船団の護衛に奔走しました。そのため敵潜水艦制圧、撃滅及び海上交通の保護の功績が認められ部隊感状が授与されました。

船団護衛中は直進することは無く「之の字」運動の航行で、敵魚雷を一日二、三本はかわしていました。また、夜間航行中は敵潜水艦の見張りに二十人位が勤務に着きますので寝不足で疲れま

「掃海艇十八号艇」は混焼式機関といって、重油と石炭と両方の機関を使っていますので補給燃料も二種類です。重油の補給は楽ですが、石炭の方は設備のある専門港では楽ですが設備のない港では人力積込しか方法がありませんので、「総員補給！」の号令がかかり、その作業には真っ黒になつての重労働の上、顔や体の皮膚が石炭焼けしてヒリヒリして参りました。

一方、重油補給の時はヒマなのですが、逆に甲板掃除をやらせられるので、いずれにしてもなかなか楽にさせてもらえませんでした。

昭和十九年二月、第一海上護衛隊司令官の作戦指揮下に入りました。月日は忘れましたがバシー海峡で南方行きの船団護送中に、ある輸送船が雷撃され沈没したので救助に行きました。このバシー海峡は鯨が多いので有名な海で、早く救い上げないと鯨にやられてしまうので、浮かんでいる兵隊に向かって「銃が邪魔で助けにくいから放せ！」と怒鳴ったら、その兵隊が「この銃は自分

の魂だから放せません」「お前はどこの兵隊だ」「自分は関東軍であります」と叫んで銃を差し上げて、とうとう終わりまで銃を抱いたままでした。幸いその兵隊は助かりましたが、陸軍の教育に感心させられました。

艇の甲板が兵隊で埋め尽くされても海にはまだ多くの兵隊が浮かんでいましたが見捨てざるを得なくなり非常に辛い思いをしました。救い上げた兵隊の中には鯨に手足を喰い千切られた者がおりました。艇には軍医が乗っておらず、看護兵一人しかおりませんので充分な処置ができず、せっかく救い上げられても出血多量で死ぬ者もありました。

海軍では作戦中「僚艦」が定められ、僚艦同士は互いに救助し合うように決められています。勝手に他の艦の救助には行けないことになっています。「掃海艇十八号」の僚船は「掃海艇十七号」になっていました。

パラオ島近海で船団護衛中に水雷艇「鷲」が近

くにいたのですが、突然大きな水煙が立上り「鷺」を覆い隠しました。やがて崩れるように水煙が治まったと思ったら「鷺」の船体がV字型に折れ曲がり、垂直になって水中に没してしまったのです。被雷して轟沈したのです。目の前の出来事にびっくりしました。その時でも救助に駆け付けたのは「鷺」の僚艦（艦名不詳）でした。「掃海艇十八号」は船団護衛の任務を続行するため現場を離れて行きました。

昭和十九年二月十日、横須賀からパラオ行き船団護衛で豊後水道を出た頃、腹痛に襲われ、盲腸の疑いがあるとの事でしたが掃海艇では手術もできず、パラオに着くまでの一週間、絶食して薬代わりにカルピスばかりを飲まされました。水兵一人が付き切りで患部を冷し続けてくれ、やっとパラオに着いたときには、ヨロヨロと艇を降り、待つていた迎えの自動車に倒れこみました。

第三十特別根拠地隊病舎（パラオ島）に入院、

手術の結果、第二種症（盲腸炎）と診断され入院、加療中、夜間東北方面の水平線にパツパツと砲火の上がるのが見えました。どこかの島が米海軍の艦砲射撃を受けているのだと思うとパラオもいつやられるかが心配で、一日も早く退院して「掃海艇十八号」に帰りたくまりました。

三月六日、全治退院となりましたが既に「掃海艇十八号」は次の任務に就いており、現在どこにいるのか判りません。たまたま北方行き「掃海艇三十一号」がパラオに寄港したのに乗せて貰い、海南島で「掃海艇十七号」に乗り換え、三月二十四日、母港呉に帰ることができました。途中敵に遭遇すること無く幸いでした。

昭和十九年十一月二十三日、十五隻の大船団を護衛して海南島の南方海面を航行中、午後十一時の深夜僚艦「掃海艇十七号」が敵爆撃機の爆撃を受け（航跡が発見された？）航行不能になったのです。我が「掃海艇十八号」が「掃海艇十七号」に接舷して救助作業中にまた敵機が襲来しました

ので交戦しました。交戦中に「掃海艇十八号」の機関砲台に被弾し、砲台員五人全員戦死、その上、機関室にも爆弾が命中し、戦死者負傷者多数に及び沈没の危機になりました。

「掃海艇十七号」は中破の損害ですみ、航行できると再びに再起したので「掃海艇十八号」の生き残りの者は「掃海艇十七号」に移乗することができましたが、「掃海艇十八号」は一時間後に沈没してしまいました。

深夜の突然の被爆で状況の把握は困難でしたが、幸い私の部下全員助かったのが慰めでした。しかし愛艦を失った気持ちは我が家を失ったと同然で残念無念でなりませんでした。

翌日、海南島に上陸、三亜海軍航空隊に仮入隊しました。約四十日間、この海南島にいて昭和二十年一月六日、輸送船「萩川丸」に便乗、一月十日呉に帰り、直ちに呉海兵団に転勤となりました。

今までの同僚、部下とは呉でバラバラになり、沈没のことを話すこと無く、また聞かれることも無く過ごす毎日でしたが、六十年経った今想い出すと不思議な気がしてなりません。恐らく昭和十九年末頃の戦局全般が敗色濃厚となり、空襲もますます激しくなり、一掃海艇の沈没なんかは問題にされなかったのでしょうか。

乗るべき艦を失って陸に上がってから三カ月が経った四月十五日、部下三十人を連れて大阪の桜島造船所に派遣を命ぜられました。

任務は海防艦「大津」の艀装員付きを拝命しました。造船所の宿舎に泊まって毎日現場に三〇分位かけての通勤でした。進水式がすんで砲の据付けについて現場で工員の指導指示が仕事でしたが、試運転中に大空襲が何回もあり、B 29 が五〇〇機来襲して造船所も大損害を受け、造船も中断の止むなきに至りました。

八月十五日の終戦を迎えて呉に帰り、九月一

日、海軍一等兵曹（陸軍軍曹）に任せられ、同日付で予備役編入となり、海軍軍人としての幕は閉ざされました。

復員後、部下だった人との連絡は、陸軍と違って他県の人達が多いので、陸軍ほど密度は多くありません。

私の場合、「掃海艇十八号」には県内の人が割合と多かったのですが、同艇は沈没したので、ただ一人とは今でも手紙のやりとりをしているだけです。

海軍程、離合集散のはげしい所は無いででしょう。特に海兵団は多人数の集まりですから、あそこに入れられたら全く行方が判らなくなってしまうのです。

戦後、戦友間の連絡が難しいので、戦友会の数が陸軍に比べて少ないのも、そこら辺が原因かも知れません。

復員する時に持って帰る物は「掃海艇十八号艇」が沈没した時に船と一緒に失くしたので少し

しかありませんでした。

携帯履歴だけは後々役に立つと思って持ち帰りました。海軍では移動のたびに衣のうを必ず肩にかついで持ち歩いたものですが、これも沈没の時、失いましたので……。

約三年ぶりに懐かしの我が家に還りました。家では末の妹が亡くなっていましたが他の者は元気でした。

間もなく農地解放の嵐が来ました。我が家は少し買上げられましたが、大部分の農地は留守家族が一生懸命耕したお陰で自作農地と認められ、手許に残されました。

私の家の山林には、未だ手が入ったことの無い昔からの太い原木が残っていますが、最近の安い外材に押されて値段が安く、採算が取れず、これが悩みの種です。森林組合でも種々運動を展開していますが、山仕事に一日一万五千円から二万円払わねばやり手がいない状態では困っています。